「研修生プロデュース計画発表会」

プロデュースできる人材育成

人口減や産業空洞化などで地方の活力が失われつつある。苦境を打開する切り札として期待されるのが地域の魅力を発掘・プランド化し、個性的な商品やサービスとして世界に売り込む人材を育てるため中小企業庁が進める「ふるさとグローバルプロデューサー育成支援事業」。ジェイアール東日本企画と事業構想大学院大学は２月 27 日、東京・丸の内のＪＰタワーで、研修生が練り上げた企画の発表会を開催。「稼げるアイデア」に集まった聴衆が耳を傾けた。

開会挨拶

可能性を広げる発信力

中小企業庁経営支援部
創業・新事業促進課課長
和栗　博氏

ふるさとプロデューサーに求められる役割は、日本の優れたものづくりや商品、生産物を世界市場に持って行くことだ。

岩手県奥州市では米を使った脱臭剤や化粧品をつくっている。糠を鶏に食べさせて、鶏の糞を田んぼの肥料にする循環型ビジネスもおこなっており、これが英国で賞を受賞。結果的に大勢の英国人が訪れるといった現象が起こっている。

ボタンの押し方ひとつで可能性が広がる。日本の人口が減少し、市場そのものが縮小していく中で、絶えず外に発信する努力が不可欠だろう。

もう一つ求められるものは、熱いハートだ。皆さんには、将来にわたって、地域活性化のために頑張っていただきたい。

ふるさとグローバルプロデューサー育成支援事業

ふるさとグローバルプロデューサー育成支援事業は、ふるさとの情報を効果的に世界に向けて発信するためのプロデューサーを育てる事業だ。

地域の多くの関係者を巻き込み、地域の魅力を発掘し、地域資源や産品をブランド化して個性的な商品やサービスを世界に売り込める人材を育成するプロジェクトで、2016年7月から実践的研修を進めてきた。

具体的には、以下の3つポイントをすべて満たす人材を指す。まず、「BRAND」だ。地域資源や商品の特性を活かしてブランド化し、個性的な商品・サービスを創出できる人材だ。次に「GLOBAL」。海外市場に戦略を獲得するため商品ニーズを高め、ファンを呼び込めることが求められる。3つ目が「CONNECT」。地域の多くの関係者を巻き込み、事業を推進できることだ。この3つをすべて満たす人材を育成するため、研修生は次の3つのステップを踏んできた。

①【2016年7～9月】主に知識を積むため、講義・ワークショップなどの座学やeラーニングを通じて学ぶ。

②【10月～2017年1月】国内外で活躍するプロデューサーのもとでOJT研修を受ける。研修場所は国内および11の国と地域に及んだ。

③【2～3月】実際に行動計画を作成し、プレゼンテーションをおこなう。2月25日、26日で研修生全員のプレゼンテーションをおこない、3人の代表者が決定し27日に「プロデュース計画発表会」として3人のプレゼンテーションがおこわれた。

約140人の研修修了生は、今後は、それぞれの地域の活性化、グローバル化につながる事業をあらゆる関係者を巻き込みながらプロデュースし、「稼ぐ地域」の実現を推進していく。

「稼ぐ地域」の実現推進

外向きの視点で問題解決

ジェイアール東日本企画
常務取締役営業本部長
鈴木　幹雄氏

発表会と並行して、東京駅で研修生の成果を展示・販売している。地域が元気になるためには、それぞれのエリアに誰かしら活躍する人がいることが大事だ。そうした人材育成に着目していたところ、「ふるさとプロデューサーグローバル版」の話があり、ぜひ協力したいと手を挙げた。

活動を通じ、地域が抱える問題を内向きに解決するだけではなく、外に向かった視点を持つことが必要だと感じた。

昨年7月に初めて会ったとき、140人のプロデューサーは皆、熱い心を持っていた。研修を終えて、そこに自信が加わったと感じている。今後は、140人がネットワークとして機能していくことを期待している。

日本を変える起爆剤に

学校法人日本教育研究団
事業構想大学院大学学長
田中　里沙氏

地域にはたくさんのすばらしい資源がある。これまでは、地域、企業、行政、学校関係などの連携が乏しく、それらがばらばらだったのではないだろうか。途中には困難もあり、たくさんのことを乗り越えたと思う。

国内の受け入れ先で切磋琢磨し、シンガポール、ベトナム、マレーシアなどTPP参加国を始めとしたなど海外にも出て、新たな経験をされたことだろう。この経験を活かし、大きな波をつくっていければよいと思う。約140人の研修生は、日本を変える起爆剤になるだろう。互いの情報を共有し、力を合わせて、この輪をますます広げていきたい。

研修生代表者プレゼン

若者に魅力ある八女に

Emolution Creative
松石　圭介氏

今回、プロジェクトの対象地域となったのは福岡県八女市。八女茶に代表される質の高い農業をおこなっている。職人が集まる手仕事の町ともいわれており、伝統工芸も盛んだ。養蜂が盛んな土地でもあり、蜂蜜の産地としても有名だ。

人口減少、高齢化、産業の後継者不在などの課題があり、八女を元気にしたいとの情熱を持って立ち上がったのが、蜂蜜事業を営む正栄だ。

八女衰退の根本原因には、若者が八女から離れていってしまうことがあると考え、若者にとって魅力ある町として八女をブランディングしたいと考えた。

エロティックでオシャレ、強烈なコンセプトで攻撃的ビジュアルで若者層の開拓を狙って「エイト・ガールズ・ハニー」を考案。

八女蜂蜜の良さを伝えるオシャレでカワイイ8人の女の子たちというキャラクターを設定し、ブランディングを進めていく。

既に佐賀大学と商品開発、福岡大学と市場調査をおこなっているが、今後は仲間を増やし、地域の団体戦で八女をブランディングしていく。

地域の歴史や産品活用

Mei-PAM
磯田　周佑氏

大学卒業後、一般企業に入社。社会人大学院の課程を修了後、小豆島に移住した。小豆島ヘルシーランドで働きながら、地域活性に携わる自称・移住サラリーマンだ。

小豆島は瀬戸内海に浮かぶ人口約2万9千人の島だ。古くより海上交通の要所で、7つの港を持つ。

最近では、台湾から高松や岡山への直行便を使ってインバウンドも増え、瀬戸内国際芸術祭の成功で一層、訪日需要も高まっている。

だが、小豆島は旧来のパッケージツアー型の受け入れ体制であり、このギャップの解決が必要だ。そこで、地域の歴史や産品を活用した新しい観光プラン「地域産品×島の歴史に宿る精神性、新しい聖地　小豆島リトリートキャンプ」を提案したい。

仕事や家庭生活の日常から離れ、自分を見つめ直す場所という禅をベースとした考えを打ち出し、多文化受容という精神性をもって安らぎを提供する。

今後は、研修でお世話になった台湾の代理店と一緒にツアーを誘致し、2019年開催予定の第4回瀬戸内国際芸術祭をプレイクスルーポイントとしたい。

オニグルミをブランド化

エヌ・エス・エス
胡桃澤　知秀氏

1年前から信州産オニグルミのブランディング事業をする構想はあったが、スタートを切ることができずにいた。ステークホルダーもいなかったが、本事業に加盟することで、事業化の見込みがついた。

オニグルミは日本全国に自生するクルミだ。青森県の三内丸山遺跡からも殻が出土しており、縄文時代から食べられていたことが分かっている。長期保存も可能で、フルーティな香りが魅力的な食べものだ。栄養バランスの良さから「日本古来のスーパーフード」ともいわれている。

本研修でタイに行き、市場調査をおこなったところ、オーガニック業界からは引き合いがあることが分かった。

現地のアイスクリームショップでクルミのアイスクリームを販売したところ、好評で食品企業と共同で新商品の開発をおこなうことも決まった。

長野県はクルミの生産高日本一だ。今後は、実はもちろん、殻なども使った新しい商品づくりに挑戦し、オニグルミ自体に新たなブランドイメージを持たせたいと考えている。

諏訪の工業を活かす旅

クローバーデザイン
宮本　総子氏

商品だ。成功させるためには、工業と観光の連携が不可欠だ。展開するために、「SUWAプレミアム」と称したSUWAブランドを推進する委員会と8市町村が連携するズーラ実行委員会の協力を得る。ズーラ実行委員会は、すでに300の旅行商品を持つチームだ。

参加するステークホルダーは約500人。それぞれの方を総動員して地域の魅力を発信していきたい。現在事務局は小所帯だが、今後はプロデューサーとしての手腕を発揮し、いろいろな人を巻き込んでみんなが楽しめる活動にしていくつもりだ。

新しい名古屋黒紋付染

山勝染工
中村　剛大氏

当社はプロデューサーである兄の私と、職人の弟の二人三脚で経営している名古屋黒紋付染の会社だ。

名古屋黒紋付染は、1611年、当時の尾張藩士小坂井家が、藩内の旗、幟などの製造にあたったことが始まりといわれている。よく知られているのは、結婚式などで着られる真っ黒の紋付袴だ。家紋の文化は日本における家族の絆を表している。

現代では、需要が減っている。2013年に会社を継いだ私は、ファッションアパレル方面に乗り出すことで、名古屋黒紋付染の生き残りを考えた。さまざまな出会いのなかで、本事業に出会い、名古屋黒紋付染の海外展開に向けた一歩を踏み出したところだ。

具体的には、米国進出を考える中小企業の支援をおこなうエムクロスで研修を受け、どのようなものづくりをすれば海外で通用するかを学んだ。

米最大規模の総合ファッション展示会MAGICへの出展も果たした。名古屋黒紋付染は全米デビューし、ストールの受注も獲得した。

地域活性化のためには人の流入が必要だ。そのために全米での売上実績をつくり、雇用を生み出したいと考えている。

広　告